OBOG Magazine

県大の星

SHIGA

USP STARS

USP STARS

03

2018 February

地識人

卒業生の今

不動産プランナー〈アッドスパイス代表〉

岸本 千佳

Chika Kishimoto

朝日新聞社報道局デザイン部デザイナー

加藤 啓太郎

Keitaro Kato

滋賀県立大学

THE UNIVERSITY OF SHIGA PREFECTURE

OBOG Magazine USP STARS 03 2018 February

滋賀県立大学　OBOG Magazine
県大の星　第３号

発行月 ｜ 2018 年 2 月
発行 ｜ 滋賀県立大学　経営企画グループ
〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町 2500
Tel.0749-28-8200　Fax.0749-28-8470

企画・制作・編集 ｜ スパイス事業部 / 双林株式会社
アートディレクション / デザイン ｜ 澤田未来（スパイス事業部 / 双林株式会社）
取材 / 編集 ｜ 野田大輔（コメディア株式会社）
監修 ｜ 印南比呂志（人間文化学部生活デザイン学科教授）
印刷 ｜ 双林株式会社

case 01

岸本 千佳

不動産プランナー
〈アッドスパイス代表〉

地 識 人

世の中の課題と向き合いながら、役目を失った建物やまちのポテンシャルを引き出す

地識人

卒業生の今

キャンパスは琵琶湖。テキストは人間。

で育った卒業生に県大教育の成果を探るインタビュー集、第3回

地域の課題を識（し）り、解決への糸口につなぐ。新しい価値に置き換える。

「県大の星」。その名のとおり様々な地域や職業の最前線できらりと輝くOB、OGのインタビュー集、第3号の刊行です。

テーマは「地識人」。時代や価値観の変化、天災や人災の影響で立ち往生する、人や暮らし、ものやこと、まちの姿をつぶさに識り、向かうべき解決の方向を示す、あるいは新しい価値に置き換える。日々、地域や社会の課題と向き合い、可能性を探り続ける卒業生に冠したい称号です。

超高齢化社会に続く多死社会の到来、フリーフォールともいえる人口減少など、世界に先駆けて日本がこれから経験することになる劇的な変化のなかで、その本領はますます発揮されていくことでしょう。今号は、その第一線で活躍する二人をご紹介。

一人は、新しい暮らし方やコミュニティの在り方を示すシェアハウスのプロデュースから京都府との連携による空き家問題への取り組みまで、不動産プランナーの立場で地域課題と向き合う岸本千佳さん。そして、朝日新聞社の社員として、情報を直観的に伝達するインフォグラフィックスを展開しながら、解決の糸口をつかめるような紙面デザインを目指す加藤啓太郎さんです。

滋賀県立大学での学びや経験が、現在の仕事にいかに結びついているか、ご自身の成長と併せて語っていただきました。

朝日新聞社報道局デザイン部デザイナー
加藤 啓太郎
Keitaro Kato
京都教育大学附属高等学校卒業
2003年度 人間文化学部生活デザイン学科卒業

不動産プランナー〈アッドスパイス代表〉
岸本 千佳
Chika Kishimoto
京都府立菟道高等学校卒業
2008年度 環境科学部環境建築デザイン学科卒業

不動産プランナー

岸本 千佳

Kishimoto Chika

略歴：

環境建築デザイン学科卒業後、東京の不動産ベンチャーを経て、2014年に京都で株式会社アッドスパイスを設立。不動産企画・仲介・管理を一括で受け、建物のプロデュースを業とする。他、改装可能物件サイト「DIYPKYOTO」の運営、移住者を応援するプロジェクト「京都移住計画」としても活動。暮らしや街に関する執筆も行う。著書に『もし京都が東京だったらマップ』（イースト新書Q）。

建築家は子どもの頃からの憧れ、しかし得意な科目は文系

建築家になりたいと思ったのは小学校5年生の頃です。ところが得意科目はすべて文系で、高校も文系コースに進みました。進路ではずいぶん悩みましたが、やはり建築の道に進みたいと思い、数Ⅲ-Cや物理をやらなくても受験できる建築学科を探しました。見つかったのが県大だったのです。

なんとか入学できたのですが、漠然と抱いていた建築家像が学びを得て実体化するにつれ『これを仕事にするのは難しい』と感じるようになりました。一回生の前期が終わった頃のことです。やはり理系的な思考が欠けていたからか、構造といった科目などでは大変苦労したことを覚えています。焦りや迷いはありましたが、ランドスケープの授業に力を入れるなど、別の可能性についての模索をはじめました。

NGOの取り組みで世界一周の旅へ

世界一周しようと決めたのもその頃です。理由の一つは、やはり建築家への執着に因みます。世界一周をして建築以上にやりたいことが見つかればそっちに進もうと覚悟をしたのです。もう一つは、大学が田舎にあるせいか生活もこもりがちで、そこから脱却したいという思いもありました。

費用を稼ぐためにアルバイトも3つ掛け持ちで頑張りました。およそ150万円を一人で貯めたので、乗船できたのは一年後、二回生の夏休みでした。

乗ってみたら立場も経験も価値観も全く違う人たちと知り合うことができ、視野が大きく広がりました。ちょうど10年経ちますが、いまも交流を続けている仲間がいます。

それくらい得たものは大きかった。しかし、建築を超えるものはないということに気付いたのです。それを機会に、設計に限らず広い意味で建築に関わっていこうと思うようになりました。

県大は実践できる人を評価、その気付きから変わり始めた学生生活

同級生に、一回生のころからマレーシアで孤児院を作るといったプロジェクトを進めている女の子がいました。出席率は単位ぎりぎりでしたが、レンガも現地の材料で作るなど、行き来をしながらアグレッシブに取り組んでいました。卒業設計提出期限の2週間くらい前に帰ってきて模型をパーっと作ったと思ったら、それが一位を獲ったのです。彼女のような実践者を評価してくれる、それが県大の素晴らしいところ。実際に卒業生には考えを形にし、プロジェクトをやり遂げる力を身につけた人が多く、私の知る出身者の多くは自営の道に進んでいます。

こもりがちだと思っていた生活は、見方を変えれば一つのことに没頭できる環境の象徴であり、製図室も当時は24時間開かれていました。クラスも少人数で、ゼミになると5人で一人の先生と向き合えますから、自ずと中身は濃いものになります。私は世界一周など好き勝手をしましたが批判を受けたことはありません。やりたいことがある人にはどこまでも寛大なのです。気付けば、私に向いている大学、居心地の良い大学と思えるようになっていました。

建築家の講演会を学生で自主運営し、成果を書籍化

『DANWASHITSU（談話室）』も学生発の事業の一つです。年4回、自分たちが話を聴きたいと思う建築家等をお招きし、自主的に講演会を開催していました。都会の大学のように、観たいものや聴きたいものがすぐそばにはありませんからね。逆に、田舎だからこそ皆さん泊りがけで来てくださいました。講演が終われば質問攻め、そして打ち上げの二次会、三次会まで、第一線で活躍する方を私たちだけで夜中まで独占できたのです。

私の代からは一年間の講演内容をまとめ『雑口罵乱（ざっくばらん）』という誌名での書籍化を始めました。いろんな印刷所から極力安いところを探し、インデザインでフレームをつくって文章を流すところからのスタートでした。私は創刊号と第2号に関わっています。当時は資金も自分たちで工面していましたが、第5号からは後輩が販売元を見つけてアマゾンなどで販売できるようになり、いまは第8号まで刊行されています。

県大ならではの近江楽座に企画を放り込んでおいたら援助を受けられたかもしれませんが、なぜか自主運営にこだわっていましたね。

500円の入場料で謝金を賄うなら入場者数は最低何人？　本は何部売ればペイできる？　といったことを計算し、自転車操業ながらなんとか実現してきました。布野先生や松岡先生には本当にお世話になりました。どちらかというと野放しに近い教育でしたが、私たち自身がやりたいことを決めれば、とことん協力してくださる、それが県大の先生方です。

見方を変える、身を投じる、県大で身につけた答えの見つけ方

卒論では京都のまちなかを流れる高瀬川を取り上げました。歴史は運河として拓かれた江戸時代初期に遡りますが、現在のまちにとってその価値はどれほどのものなのか。突拍子もないことですが、まず川に入り、流れに沿って歩いてみることにしました。すると、川沿いの歩道を歩いているだけでは見えてこない景色や聞こえてこない音があることに気づいたのです。それから都市公園として定義づけたり機能させたりするにはどうすればよいか、というような研究を進めました。使われていなかったものを再評価し、再活用の糸口を見出す。今の仕事にも通じることです。世界一周も同様ですが、まず物事をいろんな視点で捉え直し、身を投じた実践を通じて答えを見つける。これこそ県大で身につけたことのひとつ。今も大事にしています。

自分でやってみなければ人に伝えることもできません。まず自分を実験台にしてみる。それは今も可能な限りやるようにしています。

卒業後は〝まちづくり〟を仕事にするべく不動産業界へ

設計じゃないなと思ってあれこれ学ぶ中で見つけたテーマの一つがまちづくりでした。新しく建てることより今ある建物を再生したり、界隈が本来持っているポテンシャルを引き出したり。そんなまちづくりを仕事にしようと考えたら、当時の言葉で言うとそれが不動産業だったのです。社会的な評価、対価を得て建物が使われ、資金がフローすることで持続可能性が後押しされる。具体的でわかりやすいと思いました。武器になると考え、在学中には宅建も取得しました。ただ大規模な都市開発には向いていないと判断し、小規模ながら不動産業の一連の流れを学べるリノベーション業界へ進むことにしました。ところが当時はまだリノベーション事業者も少なく、求人も皆無に等しかったのです。結局『新卒お断り』と書いている東京の不動産ベンチャーの門を叩かざるを得ませんでした。

建築学生の採用面接というと、設計図面やコンセプトをまとめたポートフォリオを持参するのが一般的ですが、私の場合は『雑口罵乱』を作るためにこれだけのお金集めをしなければならなかった。そのためにこうした」といった行動力と実践力で何かを具体的にしてきたという経験をアピールしたことを覚えています。おかげで採用いただきました。

就職してシェアハウスのプロデュースを学ぶ

会社は当時、第1棟目のシェアハウスを完成させた頃で、ワールドビジネスサテライトでも大きく取り上げられていました。不動産オーナーからの引き合いも強く、第2棟目の計画が進んでいました。若い不動産ベンチャーでしたので仕事をつくるのは積極的でしたが、会社としてのバックヤードが成り立っていなかった。家族的な感じで、夕飯の出前を取るのが最初の仕事でした。だから会社では大学と同じくらい長く過ごしました。

京都へ、市役所の空き家対策に関わり、まちの現状を知る

およそ5年働き、リノベーションを通じて一通りの不動産業を学びました。ただ、東京には優秀なプレーヤーが多く、この中で独立するシビアさも感じていました。そこで、地元京都に目を向けたのです。古い建物を扱う者にとって京都は東京より魅力的である。そう確信づいてきたので帰るこ

県大生時代に運営に携わっていた『DANWASHITSU』と『雑口罵乱』

https://danwashitsu.jimdo.com/

とにしました。

京都市では空き家条例が制定された年で、ちょうど宅建を持つ不動産業経験者を非常勤として募集していました。ここでも幸い採用いただき、補助金制度の細かなルールづくりといった仕事をしました。空き家全体の把握を通じて区ごとの特性や課題を認識できたことも今の仕事に役立っています。それが欠けていたら「もしも京都が東京だったらマップ」は書けていなかったかもしれません。

アッドスパイスという屋号で不動産プランナーとして独立

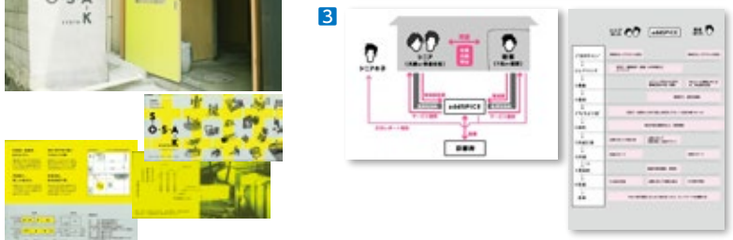
アッドスパイスとは『面白味を添える』などと意訳される言葉です。伝統のまち京都でやれることには限りがあるかもしれませんが、私にしかできないこともあるはず。一味添えつつ、いい場所を作っていくことを役目として名づけました。

今は新しい建物を建てる時代でもないし、リノベーションにしても単に再生するだけではなく、そこに存在している課題を解決していく視点が不可欠です。2017年、京都駅の近くで手がけたシェアアトリエ・オフィスSOSAK KYOTOは、木賃アパートを前身としており、老朽化もあってオーナーさんがどうしようかと悩まれていた物件でした。近くにはJRも走っていて騒音問題もあります。賃貸アパートとして再生するには騒音対策が欠かせませんが、そこには莫大な費用が掛かり収益性も低くなる。いかにもマイナスでしかない騒音ですが、これをプラスにできる使い方があるのかなと考えたときに浮かんだのが、木工や金工、彫刻などのアトリエや楽器の練習スタジオ、つまり音を出す作業者の皆さんに入居いただくことでした。ここなら存分に音を出してもらえます。おかげさまで、陶芸作家をはじめ多様な事業者が入居され、新しいコミュニティが生まれつつあります。一方ではシェアハウスの経験を活かし、京都府が新しい住宅施策として推進する「京都ソリデール」事業のお手伝いもさせてもらっています。高齢者の住まいの空き室に学生などの若者が同居し交流する次世代下宿です。

これからも超高齢化や急激な人口減少の中でいろんな問題が起きてくると思います。建物や地域、まちづくりもその問題の解決に向けて検討されなければならない時代。これからもこうした社会と向き合いながら持てる力をすべて出し切れるような仕事をしていきたいと考えています。

県大はやはり実践を通じて学ぶところです。先生もそこを評価し、応援してくださいます。仲間も見つけやすい環境にあります。それがすぐに仕事に直結しなかったとしても、私が本を出版できたように、やがてどこかでつながり、実を結ぶはずです。

自分で考えて自分のやりたいことを作っていく。4年をかけてそこに没頭する。残りの人生を支えていくための経験になりますし、そこが県大らしさだと思います。



1 web上で発表されるやいなや、たちまち話題となった「もし京都が東京だったらマップ」。2016年、著書としてイースト・プレスより新書発行。

2 アッドスパイスホームページ。プロデュース事例などを紹介。
http://addspice.jp/

3 2016年7月、京都府「次世代下宿　京都ソリデール事業」の委託事業者として採択。京都府と連携し、長期に渡り展開予定。

4 京都駅の線路沿い木賃アパートを、「クリエーターのためのプラットフォーム」シェアアトリエとしてリノベーションした「SOSAK KYOTO」。2017年6月にOPEN。
https://sosakkyoto.localinfo.jp/

case 02 地識人

加藤 啓太郎

朝日新聞社報道局
デザイン部デザイナー

問題を報じるだけではなく、解決に導くデザイナーに

建築への興味から県大へ

子どものころからプラモデルの設計図やブロック玩具の説明書が好きでした。中学生のころに不動産のチラシに載っていた間取り図などに興味を持ったことをきっかけに建築の勉強をしたいと思うようになりました。ところが私自身は文系でしたので、それでも受験できる建築関連の学科を探していて出会ったのが県大の生活デザイン学科です。学部は違いますが環境建築デザイン学科では巨匠、内井昭蔵先生の講義を履修できることも魅力でした。

入学してみると建築以外にもプロダクトをはじめ様々なコースがありました。特に興味があったわけでもない服飾もやってみれば面白いし、色んな世界を覗くことも大事なのだと入学してから実感しました。

3回生後期までは建築とプロダクトを掛け持ちしていました。当時はいずれも就職に直結すると思っていましたのでぎりぎりまで絞りたくなかったこと、そしてデザインや設計が単純に楽しかったからです。おかげで課題の量はいつも目が回るほどでした。

ゼミ室と設計演習室で学生時代の大半を過ごしました。図面を引きながら夜明けを迎えたこと、冬場にコンビニおでんで暖をとったこと、いずれも数知れず。

実習室は24時間営業、キャンパスに塀はなく、先生とも近い

実習室が24時間使える。良くも悪くもまわりに遊ぶところが少ないので学校から出ない。ゆえに課題と毎回正面から向き合える。「時間がなかった」といった言い訳のできない環境でした。「やるしかない」という毎日に、私自身は結構はまっていたように思います。制作はもちろん、友だちと時間無制限でディスカッションできたことが一番ですね。感じたり思ったりしたことを言語化することが身につきました。デザインや設計されたものには、なぜそうなったか細部全てに理由がある。この線の幅が1.5㎜じゃなくて1㎜の理由。そういうものをひとつひとつ言語化できていれば、少し整理するだけで論理的に仕立てることができるようになります。大変でしたがこの時間のおかげで自分を知ることもできました。何よりも、常に最善の答えを見つけるための行動力や思考力が身についた。これが大きいですね。今の仕事の支えになっています。

学生が少ないので先生との距離も近い。アポなしで他の研究室へ行っても話を聞いてもらえる、そんな親密さでした。そこが県大のいいところです。飽きる暇がなかった、それが正直なところです。

最もお世話になったのが2回生のときに着任された印南先生です。第一線の現場からプロがやってきた、と色めき立ったことを覚えています。デザインシンキングを注入され、物事の捉え方や価値観、世界の広さががらりと変わりました。同じ琵琶湖なのに昨日とは景色が違って見えるような感覚を味わったのです。自分の学科にはないグラフィックを志したのは印南先生の「おまえ、平面好きだよなー」の一言から。「やってもいい」と背中を押されたように思えたからです。「おまえアンテナだけは張っとけよー」の一言は、デザイナーの基本的な指針として今もずっと刺さっています。

3回生恒例のファッションショーも県大ならでは

3回生のとき学科生が中心となってファッションショーを自主制作しました。企画から舞台演出まで一貫してやったことはもちろん、近隣のお店を一軒一軒訪ねて資金を集めたり、布地をいただけそうな会社を訪ねたりしました。ご協力いただいたお店や会社は、お礼としてパンフレットに広告を掲載させてもらいました。地域とつながるなかで、机上では決して得ることのできない学びを経験する。これも県大の大きな魅力です。

演出用の映像も自分たちで制作しました。この大学、この地域でやる意味のあるファッションショーにしようとみんなで考えていましたから、彦根の街に出てロケもやりました。まさに笑いあり涙あり、すごくカロリーを使って完全燃焼したことを覚えています。

朝日新聞社報道局デザイン部デザイナー

加藤 啓太郎

Keitaro Kato

略歴：

生活デザイン学科卒業後、京都市内の印刷会社を経て朝日新聞社（東京本社）へ。2016年3月11日付朝刊の東日本大震災5年別刷り特集「福島第一原発 終わり見えぬ汚染水」をデザイナーとして担当。文字を伝達手段とした優秀なデザイン作品を選ぶ「日本タイポグラフィ年鑑2017」においてインフォグラフィックス部門の最優秀賞「BEST WORK」に選ばれました。

3回生で学科生が中心となりファッションショーを主催。資金・布地調達や、演出用映像制作、音響・照明の舞台演出に至るまで一貫して自前主義。笑いあり涙ありで完全燃焼。

※VI(Visual Identity)とはブランドの価値やコンセプトを可視化したシンボルやロゴデザインといったデザイン要素の総称で、これらの使用や展開についてのルールを規定するものがVIマニュアル。

卒業制作で県大のVIマニュアル※を作成

主に立体物をデザインするプロダクト系の印南ゼミでしたので、グラフィック（平面のデザイン）を卒業制作として認めてもらうにはどうすればいいか考えていました。きっかけは大学関係のポスターや出版物のデザインをお手伝いしたことです。当時は、県大のロゴデータもきちんと管理されておらず、びっくりするような使い方をされている状況でした。キャンパス外で目にする大学の刊行物でさえコピーを繰り返したからか不鮮明なものが少なくありませんでした。自分も困ったので、これをマニュアル化しようと思ったのです。ロゴだけでなくWEBページやキャンパス内のピクトグラムの標準化など、県大を構成するビジュアル的な要素全般について提案する内容です。

CDに納めてパッケージすれば、これも立派な「道具」になるはず。晴れてプロダクトとなり「先生よろしくお願いします」と持っていきました（笑）。

余談ですがパッケージ（薄手の段ボール）にプリントするのにとても苦戦しました。先生から「こういうのはダサかったら使わなくなるからな。もしくは箱を捨てる」と釘を刺されたことだけは記憶しています。

卒業後は印刷会社を経て朝日新聞社へ転職の動機は同窓生の姿

いまの仕事の端緒ともいえるのが、長野オリンピックで使われた競技紹介ガイドとの出会いでした。非言語なのに世界中の人が理解できる。それが今日でいうインフォグラフィックスデザインです。以来、これを仕事にできれば幸せだろうなと憧れを持っていました。

卒業して京都市内の印刷会社に入社しました。デザインデータをチェックする機会があったので、一線で働くデザイナーさんたちの仕事を隅々まで観察することができました。広告やパッケージをはじめ大半は消費行動に紐付いた仕事でした。むろんそこでの経験は現在につながっており、なくてはならないものでしたが、裁量範囲が狭く、自分の存在意義がわからなくなったのです。やはりインフォグラフィックスの世界へ、と思っていたときに朝日新聞の求人情報が目に留まり、試験を受け、デザイン部に採用されました。

転職する動機になったのは、Going my wayな同窓生の姿でした。いまもヴェネツィアで活躍する靴職人をはじめ、やはり個性的な人が多かったです。

読まないとわからない新聞から、見てもわかる新聞へ

新聞の記事に添えるインフォグラフィックスを制作しています。専門的で複雑な情報や大量のデータを整理し、イラストやチャート、グラフ、地図、写真などを用いてより直感的かつ正確に伝わるように視覚的に表現する仕事です。まず記事を読み、ニュースの中身を理解する。強調すべきものが決まったら、大きくしたり目立つ色をつけたりするのではなく、むしろそれ以外のものを抑えて際立たせる、いわば「引き算のデザイン」をします。なぜなら、要素が少ないほど読解スピードは上がるからです。現在、情報量は右肩上がりですが、ひとつの情報あたりの接触時間は減り続ける一方。スマホ読者への対応も含め、この部門の役割はますます大きくなりそうです。

東日本大震災5年の特集を担当したときは、福島第一原発に足を運んで取材をしました。除染中ののぼりが並ぶ帰宅困難区域、被災当時のままの瓦礫、汚染水、線量計のアラームなど、いろいろなことが依然進行形であるということを目にしました。震災直後は被災地の人々に早く正確に状況を伝えようという思いが強くありました。5年を経たこのときは、被災地から遠い読者にも、福島の現在位置に触れられるようなデザインを心がけました。

「日本タイポグラフィ年鑑2017」では、そうした現地の『いま』が直感的に伝わるビジュアルであると評価され、うれしく思っています。これからも報じるだけではなく、解決の糸口をつかめるようなグラフィックを意識していきたいです。

「日本タイポグラフィ年鑑2017」インフォグラフィックス部門の最優秀賞「BEST WORK」を受賞した東日本大震災5年別刷り特集「福島第一原発　終わり見えぬ汚染水」（担当デザイナー・加藤啓太郎：2016年3月11日付朝刊）

福島第一原発を取材。原発の状況をよりわかりやすく、専門用語などを噛み砕いて読者の理解の一助となるようデザイン。

2016年5月からは報道局デジタル編集部へ

昨年、デジタル編集部へ移り、朝日新聞デジタルにおけるマルチメディアコンテンツのアートディレクションを始めました。

デザイン部で制作するインフォグラフィックスの多くは、紙面やデジタルの記事に添えられるものなので、ビジュアル面においてはデザイナーで完結できる部分が多く個人プレーに近い仕事でした。一方、マルチメディアコンテンツでは、デザイナーとエンジニアが二人三脚で制作を進めています。動画、音声、アニメーションなどあらゆる技術で表現できる反面、ユーザーの閲覧環境が一様ではないことに由来する制約や検証作業も欠かせません。そして制作に関わる人間が多い、つまり速報記事とくらべてビジュアル表現に対してコストをかけている。その意義を、コンテンツごとに常に意識しなければならないという難しさもあります。

ツイッター「救助要請」通報結びつかず九州北部豪雨の教訓を視覚化

2017年7月に発生した九州北部豪雨では、ツイッターによる救助要請が拡散されました。朝日新聞の分析によると、救助を求めるツイートは224件あり、推計で4230万の利用者に届きましたが、救助を担う警察などへの通報は4件しか確認できなかったのです。この状況をいかに伝えるか。桁違いの数字群を直感的に表現することと、通報に至ったレアケースを可視化すること、この2点に主眼を置いて制作しました。

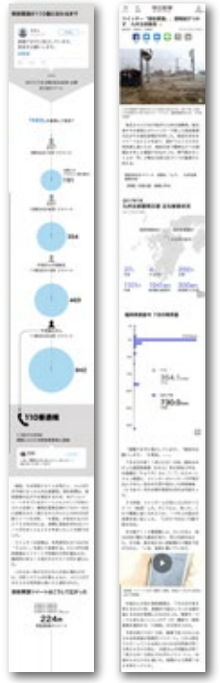
デジタル版での限定公開後、日本学術会議のシンポジウムや日本災害情報学会でも発表され、担当記者は総務省消防庁から分析結果のレクチャーの依頼を受けるほど話題になりました。識者をはじめいろんな立場の方々に届き、新たな動きを呼び起こすといった、やりがいのある仕事になりました。問題点や課題の〝解決〟に向けた道筋までを報じていこうとするソリューションジャーナリズムの入り口に立てたような気がしています。重い扉をこじ開けて次の地平を望む、それこそ県大で培ったマインドだと思っています。

県大で「チャンスと巡り合える自分」を培ってください

問題を報じるだけではなく、解決を支援できるデザイナーであり続けたいと考えています。問題の端緒は統計データの分析から開くことがあり、インフォグラフィックスはその表現に最適だからです。身近なことから政治や宇宙の世界まで、デザインする対象は多岐にわたり、難解なものも多いけれどやりがいのある仕事です。

学生の頃は思った通りにならないことの方が多いですが、その少し先には自分が変わるチャンスがあります。県大の魅力はなんといっても学生一人ひとりを尊重する少数制。実習室の環境もさることながら、先生や学生との接触率が高く、つねに刺激にさらされています。卒業して15年目に入ろうとしていますが、卒業を機に立ち上げた掲示板は同窓生の間でいまも続いており、熱いディスカッションが繰り広げられています。

かけがえのない学びと仲間、それはいつかチャンスと巡り合うためにあるはず。滋賀県立大学でしっかりと備えてください。



2

1

加藤さんがアートディレクションを手がけた朝日新聞デジタルのマルチメディアコンテンツ。

1 住み続けたい島へ　SDGs｜島の人たちと考えた
http://www.asahi.com/special/sdgs/amacho/

2 ツイッター「救助要請」、通報結びつかず　九州北部豪雨
http://www.asahi.com/articles/ASKB45TBXKB4TIPE027.html

県大時代の思い出 USP アーカイブ Archive Vol.3

イラストレーション：GOIC 山本里士（滋賀県出身）

加藤 啓太郎さんの場合

●～印象に残っている場所～

パリヤからのバッカス

課題提出のたびに他学年も巻き込んで打ち上げをやりました。スーパーのパリヤへ買い出しに行き、酒屋のバッカスをハシゴする方程式。

●～印象に残っている場所～

をかべ

ここのちゃんぽんの野菜で1日分の野菜を摂取した気になっていました。

●～思い出の一品～

パラ銀

伝言ノート。生活デザイン学科ゼミ室に自然発生的に常備され、コンペや就活情報から恋愛相談まで幅広い話題が連日書き込まれました。第7巻はweb版になり2017年12月現在も継続中。

●～こだわりの一品～

ステッドラー　シャープペン 925 09（0.9mm）

（旧型のもう少し重いのが好みですが）軽さ、芯の強さ、本体の堅牢性すべてGood。製図に限らず全方位型。

岸本 千佳さんの場合

●～印象に残っている場所　その1～

建築棟の非常口

建築棟3階の非常階段に琵琶湖を見渡せるところがあります。煮詰まったときはそこで休憩していました。そこにたまたまいた人と話すことでもやもやしたものが晴れていくみたいな。なくてはならない場所でしたね。

●～印象に残っている場所　その2～

談話室

今も続いている建築家を招いての後援会「DANWASHITSU」はここに集まる学生から生まれました。講演会が終わるとここでビールを飲みながら先生を質問攻めにすることも恒例でした。学生や先生、いろんな人の距離を縮めてくれる場所でした。